

気がついたら熱湯風呂
の上だった件

グリーン豆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

えだまめとして生を受けた彼は茹でられたあと、気まぐれな神に出会った。なぜ彼はえだまめとして生を受けたのか？神の気まぐれにより、特にシリアスでもない物語が展開される！

目次

- 1 気がついたら熱湯風呂の上だった件

気がついたら熱湯風呂の上だった件

「話をしよう。あれは今から36万……いや、114514万年前だったか……まあいい、俺にとっては過去の出来事だがとりあえず今の状況は多分、ヤバイ出来事だ。」

「気がついたら熱湯風呂の上だった件」

母「えだまめ、そんな装備（殻）で大丈夫か？」

えだまめ「大丈夫だ、問題ない。」

俺はえだまめ、皆からは好かれてる方だと思う。今日は最近できた彼女と受粉の予定なんだ。俺には32通りの仲間がいるから、出会えたのは本当に奇跡なんだぜ☆まあそんな訳で待ち合わせ場所の2ー5の枝で待ってたわけなんだが……

えだまめ「ん？」

俺はある異変に気づいた。いつもなら沢山の仲間が着いている枝だが……ほかの仲間たちが見当たらない……

えだまめ「妙だな……皆どこにいったんだ……？」

俺は何となく心配になって顔を覗かせた……その時だった……
えだまめ「うっ……」

俺は謎の浮遊感に包まれながら意識を失った……

第2章く地獄絵図

俺は何かが弾けるような音を耳にして目を覚ました。

えだまめ「なんだ……？この音……？」

俺は何かの上に乗っていた。音は下の方からする。

えだまめ「うっせえなあ……なんだよ」

俺は下をみた。そして……自分の目を疑った。何せ目の前には親友、親、そして……
彼女。例外なく見るも無惨な姿になっていたからだ……

―第三章く対人

えだまめ「あっ……ああ……」

俺は訳が分からなかった。なんでこんな所にいるのか。なんで自分の大切な人が死んでいるのか。そんな時、声があった。

??? 「ん？こんな所に1個残ってるやん、勿体なくなるとこだったあ」

俺はまた浮遊感に包まれた。だが意識はある、俺は必死に叫んだ。

えだまめ 「おい！何しやがる！この手を離せ！」

そういつた途端、ふっと体が落ちる感覚に襲われた。声が聞こえる

??? 「うわっ！なんだコイツ！喋ったあ?!」

俺はそんな言葉を聞き終える前にあの地獄の中へと消えていった。一瞬暖かい感覚に見舞われたが、すぐさま体が焼けるような感覚に陥った。俺は何が起きたか知らぬまま、意識を失った。そんな中、ある声が聞こえた

「神はいつている…。ここで死ぬ定めではないと。」

―第4章―未知の世界

えだまめ 「あれ？ここは…。？」

気が付くと見慣れた光景ではなく、かと言ってさっきの地獄では無い場所にいた。そんな突然の変化に困惑していると、さっきの声が聞こえた。

??? 「やあ、目が覚めたかい？」

声の方向に目を向けるとそこには先程見た生物がいた。

えだまめ「誰だお前は！また俺を地獄に突き落とすのか！」

すると???は少し驚いた顔をしたあと、笑って見せた

???「ハツハツハ、そんな事はしないよ。そうだね、名をルシフェルとしよう。」

彼はそういった後、更に言葉が続けた。

ルシフェル「君はこのまま子孫を残して朽ちるとでも思っていただろうが……それは違う。元々君は死ぬために誕生した。我々で言うところの、タダの食料だよ。」

ルシフェルはそんな信じられないことを言う。なんだコイツは？いきなり何をいつている？

えだまめ「信じられるか！俺はアイツと子孫を残すはずだったんだ！そもそもお前はこういう存在なんだ！」

ルシフェル「ふむ、そうだな。私は神だ。お前の子孫を生み出した存在、そして私のような生物を人という。お前の親族達も、お前も、人に食べられるために生まれてきたのだ。」

えだまめ「そんなわけないだろ！」

俺は必死で反論した。しかしルシフェルは冷たい目出こう言い放った。

ルシフェル「いいや、真実だ。事実君の親族たちは皆茹で殺された。君も、あの時死

んだ。」

俺はひたすら困惑した。当たり前前だ。今まで信じてきた人生、知識を全て否定されたのだから。そして、そのことを信じざるを得ない状況だと悟った。

えだまめ「俺は：：俺達はその程度のもだったのか：：」

俺は絶望した。そんな様子を見ながら、神はいつた。

ルシフェル「君の親族はもう甦らせることはできない。だが君は違う。望むならば君が生き残るまで命を捧げよう。どうだ？」

俺は耳を疑った。生き返れるというのだから当然だろう。だけど：：

えだまめ「：：やだ、もう、生きるのにも疲れた：：」

俺はもう生きる気力など一ミリもなかった。当然だろう。これから生きていつても何をしていればいい？

ルシフェル「そうか：：こまったな：：このままではこの物語は終わってしまう：：

ああいや、なんでもない。そうだな：：ならばこうしよう。もし生き残ることが出来たら、君に人としての生をあげよう。どうだ？」

俺は正直神がなにを考えているのか分からなかった：：だがよく考えてみるとその言葉の真意が理解できた気がした。

えだまめ「お前、神の中でも嫌われているだろう？」

ルシフェルは少し笑った。そして……いった。

ルシフェル「そんな事はこの物語には必要ない。それでどうする？やり直すか？」
ルシフェルは笑っていた。悪魔のようだった。

えだまめ「ああ、やり直す」

ルシフェル「そうか、幸運を祈るぞ」

彼が手をかざした所に扉が現れる。

ルシフェル「ここを通れ」

えだまめ「1つ聞かせてくれ。なんで俺を選んだ？なんで俺にこんなゲームをやらせる？」

ルシフェルは鼻で笑って見せて、そして……まるでこう言われることを分かっていたかのように話した。

ルシフェル「君のことを助けたかったからだよ」

俺は正直雰囲気割には普通のことを言うんだなと思った。だがそんな事はどうでもいい。俺は人にならなければいけない。人になって……

——復讐するんだ。手当たり次第に殺してやる

俺は扉に入った。途端、意識を失った。最後に頭に残ったのは扉が閉まる音だった。

えだまめが扉に入った後、彼は誰に言うでもなく独り言を発した

ルシフェル「そんな理由が1割。のこった9割は神の偶然と気まぐれだよ。彼がきつかけを作らなければこの物語は存在しなかった。」

そう、彼が言い残して消えていった……

1 第5章く生存

俺は意識を取り戻す。聞きなれない音……二度と聞きたくなかった音が木霊した。

えだまめ「戻って来たか……さて！どうするかなあ」

足音が聞こえる。そして、見覚えのある顔がみえた。

えだまめ（まあ、死にながら考えるか。時間は無限にある。だから、まあ、長い付き合いになるこいつにも挨拶しなきゃな……）

そう考えて、俺は……挨拶をした

えだまめ「よう、これから長い付き合いになるけど、よろしくな。」

聞いたことのあるセリフ、感じたことのある温もり、そして……慣れることはないであらう痛みを残して、俺は意識を失った。

そこから先はひたすら繰り返した。やがて聞きたくなかった音は聞きなれた音に、慣れぬ顔は見慣れた顔となった。しかし、死ぬ間際の痛みだけは慣れなかった。

えだまめ「ここまでながかった。まあ、それも今回で終わりだ。」

俺は下を見る。もう会えないであろう彼女の顔がみえた。

えだまめ「ごめん、助けてやれなくて、でも、敵はうつから。」

そう言つて俺は……自ら下に降りた。

―第6章―生存

俺は下に落ちた。そこには偶然にもボールがあつた。そのまま俺は偶然にも窓にはね、偶然にも空いてる窓から落ち、そして偶然にも、あつさり地におちた。俺は違和感を感じながらも、しかし堪えきれぬ喜びを嘔み締めて言つた。

えだまめ「ルシフェル、生存したぞ」

どこからかおめでどう、君は生存した。という声が聞こえてきて、俺は意識を失つた

目が覚めると、久しぶりな、しかし待ち望んだ顔がそこにはあつた。彼は、いった。

ルシフェル「おめでどう、えだまめ。まさか810回目で達成できるとは思わなかつ

たよ。おめでどう」

俺は焦る気持ちを抑えきれずに言った。

えだまめ「いいから早く俺を人間にしろ。」

ルシフェルはやれやれといった表情をしながら言った。

ルシフェル「分かっているよ。だが注意点がある。これからは我々は関与しない。何があつても自己責任だ。いいね？」

俺は困惑した。そんなの当たり前だと思つていた。だからその言葉をあまり重要視せずに言った。

えだまめ「いいから、早くしろ！」

ルシフェル「分かつたよ。それじゃ、頑張つてね」

ルシフェルが手を振つた瞬間、おれはまた意識を失つた。

―第7章―目的

俺が目覚ますと、目の前には沢山の人がいた。ふと自分の体をみる。人そつくりだつた。なら、目的を果たそう。

えだまめ「待つてろ、人。殺してやるからな」

俺は人にとつて何が脅威か死に戻りで知つた。おれは危険物と書かれたゴミ袋の中から包丁をもち、人混みへと向かつた。

目の前に人がいる。それも沢山だ。試しに横を通りかかった人を刺してみる。簡単に倒れた。なるほど、これなら俺でもできる。周りの人が顔色を変えて逃げた。逃がすわけがないのに

そこから先はまさに待ち望んでいた事だった。簡単に死んでいく。俺は歓喜した。えだまめ「どうだ！思い知ったか！これが我らの憎しみだ！」

だが包丁は段々切れ味が悪くなる。とうとう女の腹半分切ったところでナイフが止まった。そう言えばこいつは他のやつに比べてずいぶんお喋りだった。少しくらい話を聞いてやろう。そう思つて彼女の言葉に耳を傾けた俺は……絶望した。

女「どうして……？どうしてこんな事したの……？えだまめ君……」

何を言っているんだ？この女は……なぜ俺の名前を知っている……？

女「ねえ？覚えてないの？わたしよ？大豆よ？」

彼女は知っていた。彼女の名を、俺の名を……じゃあ、この女は……？

神、生まれ変わり。その意味を理解した俺は、手に持っているもので自分の顔を引き裂いた。

―第8章くなんの変哲もない、少し拙い物語

ルシフェル「ほう、面白いことになったなあ。分かっているても楽しい」

ルシフェルは見ていた。彼が人を殺すところ、自分の生まれ変わった彼女を殺すところ、そして……自分を殺すところを……

ルシフェル「彼にとつてどつちが幸せだったのだろうね？ 仇を取らず、しかし彼女を殺さずにすんだ物語、仇を取り、彼女を殺す物語、どちらも楽しそうだが、今回は後者に傾いたただけだ。」

そんなルシフェルの後ろから声をかける者がいた。

??? 「だが……少し拙すぎないか？ どこもかしこも矛盾や違和感しかない偶然、もつと君なら上手くやれるだろう？」

ルシフェルは彼の存在にきずき、いった。

ルシフェル「おお、イーノック。そこに居たか、なあに、ただの暇つぶしだったからな。もつと練ることもできたが……気が向かなかつただけだ。」

イーノック「そうか……まあ、1時間程度の物語だし、そんなものか。しかし、君はこんな事したこと無かつただろう？ こんな手間のかかる物語を作ることなんて。1体どういう風の吹き回しだ？」

ルシフェルは眠い目をこすりながらいった。

ルシフェル「少しきつかけがあつてね。だからこの物語を作った。まあかなり疲れるし手間が掛かるからもうやらないけどね。でも貴重な時間だった。きつかけをくれた彼には感謝してるよ。」

イーノツク「そうか……まあ君がいいならいいんじゃないかな？オチは無いけどね。」
ルシフェル「しようがないだろ、初めてなんだ。まあここまでたどり着くものはそう
そういないだろう。これは私の自己満足なのだからね。だか、きつかけを作った彼には
責任を持つて見て欲しいかな。」

ルシフェルは箱のような物を取り出した。

ルシフェル「さて、ここらで終わりにしよう。まあ楽しめたよ。」
彼は少し笑つて……画面をおした。